第 1 展示室

勾玉とは

琉球諸島には古くから続く土着信仰があり、その中では常に女性が儀式における最も重要な役割を果たしてきました。特定の人々は神人（かみんちゆ、godly people）であるとされ、影響力のある「ノロ」と呼ばれる女性司祭が同じ家系内で何世代も引き継がれている役割を担っています。勾玉と呼ばれる装飾的な石で作られた首飾りは、何世紀にもわたって地位と権力の象徴として大切にされており、母から娘に受け継がれています。

勾玉は、コンマの形に削られ、磨かれた天然石です。勾玉は野生の獣の爪に似ており、先史時代の南満州と韓国のシャーマニズムの風習に起源を持つとされています。日本の主要島群では、勾玉は紀元前 1000 年から 6 世紀にかけて先史時代の人々によって装飾品や儀式的な道具として使われ始め、のちに列島全域に広まりました。沖縄諸島に勾玉が伝わったのはずっと後の 12 世紀頃だとされています。儀式の時にだけノロが特別な白い衣装とともに身につける勾玉は、神聖なものであると考えられています。

この勾玉の首飾りは今帰仁阿応理屋恵（あおりやえ）という位を受けられた女性司祭が代々所有していました。今帰仁阿応理屋恵は沖縄本島の北部全域の最高神女として、今帰仁城を中心とした祭祀を司っていました。この首飾りは代々引き継がれ、一族から寄託を受けました。一番大きな勾玉は黒曜石でできています。この黒曜石は、日本の主要四島のうち一番北にある北海道の十勝から来たものとされており、当時の貿易経路の広範さを示しています。首飾りについている他の勾玉と楕円形の玉は、蛇紋岩、玉髄、流紋岩、石英、蠟石、碧玉、緑色片岩などの石で作られています。その起源についてはほとんど分かっていません。一番大きな勾玉が中心にあり、他の石は正面から最も魅力的な形と色が見えるように配置されています。この宝物は代々の今帰仁阿応理屋恵に受け継がれ、現在では沖縄県の有形文化財となっています。